

2017年の針路 ピュアな ココロで未来を拓こう!

2017年がスタートした。
英国のEU離脱、米国大統領選など、
2016年の世界は大きく揺れ動いた。
2017年も「激動」が予想される。
前に進むためには、時代をどう受け止め、
未来を拓いていけばいいのか。
ピュアな視点で日本の政治にアプローチし、
ワーキングピュア世代に共感を広げている、
春香クリスティーンさんと
神津会長が語り合った。

タレント(ワーキングピュア世代)
春香クリスティーン

Haruka Christine

連合会長
神津 里季生

Rikio Kozu

世界から見た日本
日本から見た世界

「ペット先進国」スイスから
単身来日

—2017年、新しい年を迎えました。新春対談のテーマは、揺れ動く時代の中でどう未来を拓いていくか。まず、「世界から見た日本、日本から見た世界」という視点が一つの切り口になるのではないかと思います。春香クリスティーンさんが2008年にスイスから来日された時、日本の印象はどうだったんでしょう?

春香 私は、父が日本人、母がスイス人で、スイスのチューリッヒで生まれ育ちましたが、日本にはずっと「憧れ」があったんです。高校生になって、自分のアイデンティティーを考える中で、もう一つのルーツである日本のことをもっと知りたいという思いが強くなり、親元を離れ一人で日本に来ました。それまでも何度か日本を訪れたことはあったのですが、実際に暮らしてみると、東京は時間

の流れ方が違う。毎日、何かが起きていて、刺激的で、不思議な世界観があつて、魅了されました。

神津 チューリッヒは国際組織の大会で一度訪れたことがあります。が、歴史ある街並みとアルプスの美しい自然が調和した素敵などころですね。たまたま最近、スイスは世界でもトップレベルの「ペット先進国」だと知りました。日曜朝の『ペットの王国 ワンダランド』(テレビ朝日系列)という番組をよく観るんですが、12月に3週連続でスイス特集があつて、春香さんもゲストで出演されていましたね。

春香 ご覧いただいたんです。ありがとうございます。日本に魅力を感じる一方で、「違い」を感じるところもたくさんあります。ペットとの関係もそうですね。スイスでは、ペットは家族の一員で、乗り物やカフェやデパートも同伴OKです。そのために飼い主は責任を持って「しつけ」を行います。スイスのペットショップは、ペットのための食料やグッズを置いているが、生きている犬や猫を展示販売するということはありません。飼い主が高齢であるなどの事情で

飼えなくなった場合は、新たな飼い主が見つかるまで保護施設で預かります。殺処分はありません。

神津 わが家では、飼い主に捨てられたり虐待された犬や猫を保護して一緒に暮らしているんですが、私たちが願っていることが、スイスではすでに実現されていて日本との違いを痛感しました。

日本では日常会話に「政治」が出てこない！

―ほかに日本に来てギャップを感じたことはありますか？

春香 いちばんギャップを感じたのは、「政治」への距離感ですね。日本の高校に編入したのですが、学校生活の中で、政治や社会問題など日頃ニュースになっているようなことがまったく話題に出てこない。驚きました。スイスの高校では、ファッションやテレビ番組の話と同列で政治や社会問題がごく普通に話題になります。みんなそれぞれ自分の意見を持っていて、ディベートしたり、ディスカッションをします。ところが、日本では、あまりにも政治の話が出てこな

い。日本の政治ってどうなっているんだろうという好奇心から「政治」ウォッチャーになったんです。

神津 なるほど。確かに最近「政治」を避ける傾向が一層強まっているのかもしれない。

春香 昨年、18歳選挙権が実現しました。でも、投票できる年齢が下がったというだけで、若い人たちに政治に関心を持ってというのは難しいと思います。仕事や子育てなどで現実的な壁にぶつかって、それが政策や制度に関わる問題だと知った時、政治に目を向けるようになるのだと思います。

神津 18歳選挙権をきっかけに、「主権者教育」の必要性が叫ばれていますが、今ごろ、そのことに気づいたのが日本という国なんですよ。これは地道に取り組んでいくしかないんですが、春香さんのような方が、政治について発信してくれるのは心強いです。

春香 私は「趣味は政治」なんて言っているんですが、でも、日本で「政治」的な発言をするのは難しいとも感じています。「投票に行こう！」と呼びかけることはできますが、選挙期間中は「公平

とが大事だと思っています。」「この新聞記事について、他の人はどう思うんだろう？ 自分はこう考えればいいだろう？」。そういうところから、日常生活の中でもっと話題にしていけば、政治に関心が持てる。選挙になった時も、何が争点なのが見えてくるし、投票行動にもつながると思うんです。

揺れ動く世界 広がる格差と分断

分断は決して人間を幸せにしない

―本題に入ってきました。今、世界の情勢は大きく揺れ動いています。何が起きているのか、背景には何があるのか？

春香 私が生まれた翌年の1993年に、EU（欧州連合）が発足しました。スイスはEUには加盟していませんが、さまざまな協力協定を結んでいて、人の行き来も自由です。だから、子どもの頃は、ヨーロッパが一つになるうとする高揚感を肌で感じてきました。それが今、壊れようとしている。

テロの脅威、止まらない難民流入にEUへの不満が高まり、統合とは正反対の、閉鎖的な分断社会へと向かおうとしている。胸が締めつけられるような思いです。

神津 連合の結成は1989年ですが、東西冷戦後の世界で始まった、EUのソーシャル・ヨーロッパの試みには、学ぶところがたくさんあると思います。今年は、フランス、オランダ、ドイツなどで政権選択の選挙が実施されますが、反EU・移民排斥を唱える勢力が支持を広げています。イギリスのEU離脱や米国のトランプ新政権の影響も十分見据えていく必要があります。

春香 ただ、移民排斥を唱える人たちを人道的に非難するだけでは、問題は解決しません。背景には何があるのか考える必要がある。おそらく人々が排外的になるのは、経済的な事情があるからです。先進国でも格差と貧困が広がっています。ふつうの人たちの生活が苦しくなっているんです。だから、かつての豊かさを取り戻すには、移民を追い出しかないと言った政治家が支持を広げているんだ

性」を保つためにメディアを通した発信に限られます。前後の文脈を抜きに、フレーズの一部分が切り取られて拡散したりすることも少なくありません。

投票に行くのは、もちろん大事ですが、やはりその前の段階で、日頃から社会問題に関心を持ち、話し合える環境をつくっていくこ

春香クリスティーナ

1992年、スイス連邦・チューリッヒ市生まれ。父は日本人、母はスイス人。日本語、英語、ドイツ語を操る。2008年に単身来日し、タレント活動を開始。日本の政治に強い関心を持ち、国会傍聴、国会議員の追っかけ取材に勤しむ。テレビ番組のコメントーターとして活躍するほか、新聞、雑誌への寄稿も多数。著書に『永田町大好き！春香クリスティーナのおもしろい政治ジャパ』（マガジンハウス）、『ナショナリズムをとことん考えてみたら』（PHP新書）など。

「人々が排外的になる背景には『経済的事情』があります」

神津里季生
連合会長

と思います。

神津 おっしゃる通り、今、世界に広がっているのは、「格差」と「分断」です。日本も例外ではありません。でも、分断は決して人間を幸せにしない。

連合は、ITUC（国際労働組合総連合）という国際組織に加盟していますが、ITUCは、格差と分断が進む世界に対して、誰も置き去りにしない「包摂的成長（Inclusive Growth）」と「ディーセント・ワーク（働きがいのある人間らしい仕事）」を求めています。27年前、日本の労働組合は、違い

「連合は包摂的成長と
ディーセント・ワークを
求めています」

を乗り越えて大同団結し、ナショナルセンター連合を結成しましたが、まさに労働組合こそ、分断されては力を発揮できません。格差と分断をどう乗り越えるかは労働組合にとって、今、最も重要な課題だと受け止めています。

春香 そうですね。日本に難民が大量に流れ込んでくることは考えにくいかもしれませんが、それは本当に大きな問題で、日本も無関係とは言えない。私は、2015年の年末から年明けにかけて、「バルカンルート」と呼ばれる難民の移動経路をたどって難民問題取材しました。特にドイツの人々は押し寄せる難民をどう思っているのか、知りたかった。ちょうど1年前のことですが、街中でインタビュースると、驚くほど受け入れに否定的な意見は少なかったんです。なかでも、14歳の女の子が、はつきり自分の意見を語ってくれたのが印象的でした。「私の親の職場にも難民の人たちが働いている。職場の仲間だと思っている。受け入れるべきだと思う」と。おそらく家族の間で、難民についてどう考えるべきか、背景にはどんな問

題があるのかを普段から話しているのだと思います。

神津 確かに日本は島国で、難民・移民は身近な問題とは言えません。欧米がどんなに揺れ動いていても、日本は平穏だと思ってしまうんですが、私は、そのことにものすごく危機感を感じているんです。経済がグローバル化し、国境を越えてヒト、モノ、カネが行き交う時代に、日本だけで成り立つ論理がいつまでも通用するはずがないからです。

2017年

未来を拓く

暮らしの問題の解決から

—格差と分断にどう向き合い、未来を拓いていけばいいのでしょうか。

春香 排外的な考え方が広がる背景には、経済的事情があると言いました。政治や国際情勢にもっと目を向けるべきだと言っても、まず「自分たちの暮らしをなんとかしてくれ」という思いがある。でも、

そんな余裕はないと無関心でいたら、自分たちの生活をもっと危うくすることになってしまう。だからまず、人々が今、暮らしの中でどんな問題を抱えているのかを、日常のいろいろな場面で語り合うことができるようにしていくことが必要だと思っています。

神津 まったく同感です。そこで連合が取り組んでいるのが、「クラシノソコアゲ応援団！ RENGOKAMPAIN」なんです。

春香 クラシノソコアゲ…。どんなことをしているんですか？

神津 例えば、これ。みんなデバッグを付けようとか。

春香 おお、そういうところから…。

神津 私も最初にこの企画を聞いた時は「なんでデバッグなの？」と思ったんですが、これはこれで意味があるんです。日本の労働組合は、企業別組合が中心で、それが集まって産業別労働組合（産別）を組織しています。私は、鉄鋼や造船重機、非鉄産業の労働組合が加盟する基幹労連の出身ですが、繊維やサービス産業の組合が加盟するUAゼンセン、地方公務員の組

合が加盟する自治労、自動車総連、電機連合など、現在50の産別が連合に加盟しています。これが、いわば連合運動のタテのラインなのですが、一方では47都道府県に地方連合会において、地域の労働組合が産別の枠を超えて一緒に活動するヨコのラインもつくっている。地方連合会の役員の多くは、通常タテのラインで活動している人たちなんです。この「クラシノソコアゲ応援団！」のバッジを付けることで、連合の一員であることの一体感を強め、ヨコの運動の大切さをアピールするきっかけになっている。そんな効果があるのかと、私も認識を改めたところです。

春香 なるほど。キャンペーンの具体的なテーマは何ですか。

神津 「暮らし、苦しくなっていないか？」「仕事、きちんと報われていますか？」「老後や子育て、不安はありませんか？」「いまの政策、働く人が主役ですか？」という4つの呼びかけを通して、暮らしの中で困っている問題を引っ張り出し、政策課題として解決していくと取り組んでいます。

春香 きっと切実な問題を抱えて

いる人がたくさんいると思います。

特に私がキャンペーンに期待したのは、働き方の問題です。実は、日本に来てもう一つ驚いたのはコンビニやファミレスが24時間年中無休で営業していること。便利できめ細かいサービスに感動したんですが、でも働いている人は大丈夫なんだろうかと思うようになってきました。最近、広告代理店の新入社員の過労自殺問題もあって、労働や働き方に対する若い人の関心は、ものすごく高まっています。

神津 おっしゃる通り、「働くこと」について、今ほど世の中の関心が高まったことはなかったかもしれません。日本人の勤勉さは誇るべきものですが、ブラックな働き方と紙一重という危うさもある。働く人たちの労働条件や健康確保がなおざりにされてきたことが、深刻な問題につながっている。労働法制のあり方を含めて考え直すべきだと、かねてより主張してきました。

もう一つ、賃金の底上げ・格差是正も重要です。この20年、賃金の平均水準低下が続いただけでなく、大手と中小の格差が拡大して

しまった。格差是正は簡単なことではないんですが、この間「底上げ春闘」を前面に掲げて踏み込んだ取り組みを始めています。今年は、昨年の成果を継続・拡大し、「賃金は上がる」という常識を取り戻していきたいと思っています。

—最後に春香さんから読者にメッセージを。

春香 私自身が悩み考えてきた中で気付いたのは、私たち一人ひとりがこの社会を支えている当事者であるということです。だから、自分自身の問題として、社会が直面する問題を考え、政治に向き合っていく必要がある。これから「賛否」を問われる場面も増えてくるかもしれませんが、そこに至るプロセスでオープンに意見を言い合える日本であってほしいと思います。対話を通じてしか、私たちは前に進めません。労働組合は、そのようなことが根付いており、実践されているように思います。連合運動が、希望ある未来を拓いてくれればと思います。

—素敵なメッセージをありがとうございます。

「進行／西野ゆかり 連合広報・教育局長」



今年もよろしく
お願いします

連合運動が
希望ある未来を
拓いてください

そのための
「クラシノソコアゲ応援団！」
キャンペーンなんです

暮らしの中で
どんな問題があるのか
語り合う場があれば…